

## 編集後記

■『Language Education』12号には、論文4本、研究ノート1本、特別寄稿1本、講演会記録1本が収められている。各論文では、授業成果、研究成果さらには今後の課題や展望などを論じている。研究ノートでは、江戸川大学のニュージーランド研修の現状報告と学生意識がまとめられている。語学教育研究所の初代所長を務められ、現在江戸川学園理事の堀江固功先生から特別に寄稿いただき、2013年1月に特別講師としてお招きした松村賢一先生からも玉稿を頂戴した。

■堀江先生は、語学教育研究所創設に中心となって尽力され、この紀要の第1号を発刊する際にも健筆を振られた。私自身も、堀江先生と初めて仕事を一緒にさせていただき、先生の英語教育に対する情熱に押されるように、当時の基礎英語の履修学生の実態調査と分析を行ったことを昨日のように思い起こす。堀江先生は常々「私は英語教育の専門家ではないので、的外れなことを言っているかもしれないが」とおっしゃるのだが、専門として教える側が見えない部分や気づかない点などを指摘してくださった。日本の英語教育、特に江戸川大学の英語教育を何とか向上させたいと願いながら、10年前と変わらない情熱と気迫を持って、様々な提案をし続けてくださり有り難く思う。

■2014年4月から新しい学科「こどもコミュニケーション学科」がスタートし、全学の英語カリキュラムも一新する。より実践的な英語運用能力が身につけられるよう、より多くの学生が英語学習に親しみを持ち語学学習が楽しいと思ってもらえることを目的に考案されたものである。今後数年かけて、このカリキュラムを充実させ、「英語の江戸川大学」といった評判を得られることを願う。2020年には東京オリンピック・パラリンピックが開催される。世界各国から人々が集う、国際コミュニケーションの場となるであろう。こうした機会に活躍できる江戸川大学の学生たちの姿を思い描きながら、英語教育に取り組みたい。

■講演会記録の玉稿をくださった松村賢一先生は、中央大学で英語および英語文化を教授され、中央大学のクレセントアカデミーの所長を務められた。また日本のアイルランド文学・文化の第一人者であり、数々の著作を著しておられる。現在、中央大学名誉教授で日本イェイツ協会、日本アイルランド協会等で理事を務めている。松村先生は、英語のみならず、アイルランド語や日本語・日本文学にも造詣が深い。昨年の特選授業では、広範な知識と多くの海外体験を織り込みながら音声を基軸にして「ことばと文化」をテーマに、深い教養にあふれたお話で100名ほどの学生たちを魅了した。実際に音楽や音声を流しながらの講義であったが、今回の記録からも音声の魅力が充分お伝えできるのではないかと思う。

■今年度から「資格取得支援制度」が実施され、英語関係では英検やTOEICの受験者のうち約10名がその対象となった。資格取得に大きな関心を示す学生が増えているが、実際の受験にはなかなか結びついていない。もっと多くの学生にチャレンジしてもらいたい。しかし、TOEICでは高得点を獲得する学生も確実に出てきている。英語担当教員の方々の熱心なご指導、さらに江戸川大学の教職員の方々のご協力とご理解の賜物と考えている。心より感謝申し上げますとともに、今後ともご支援をお願い申し上げます。最後に、学術情報部の高橋恵美さんには、今回、原稿の入稿が遅れたが、上手に対応していただいた。あらためて御礼申し上げます。

語学教育研究所長 海老澤 邦江